

薩摩（鹿児島）の文化と稲盛和夫

吉田 健一（鹿児島大学 稲盛アカデミー・准教授）

Satsuma (Kagoshima) culture and Kazuo Inamori

YOSHIDA Kenichi

キーワード：郷中教育、かくれ念仏、西郷隆盛、『南洲翁遺訓』、日新公いろは歌

はじめに

京セラとKDDIを一代で大企業に育て上げ、JALの再生でも知られる稲盛和夫（以下、稲盛と略す）は鹿児島の出身である。稲盛が生まれたのは戦前の1932(昭和7)年であるが、稲盛は昔からの薩摩（鹿児島）の文化や気風・風土から大きな影響を受けている。本稿では薩摩（鹿児島）の文化が稲盛の思想（フィロソフィ）に与えた影響について考察する。

薩摩には昔から異年齢で互いに教育を行う郷中教育という独自の教育があった。また薩摩には宗教的な伝統としてかくれ念仏があった。また今も昔も西郷隆盛の影響が非常に大きい。かくれ念仏と郷中教育とは直接的には関係がないが、郷中教育と西郷の存在は切っても切れない。本稿ではこれらがどのようなものかを説明した上で、稲盛がこれらの薩摩（鹿児島）の文化からどのような影響を受けたのかを考察する。

1：郷中教育

1-1：郷中教育とは

最初に郷中教育について見ていきたい。郷中教育とは前近代まで行われていた薩摩藩の武士階級の子弟に対する教育である。郷中の起源は島津義弘によるとされている。

郷中とは今の鹿児島の中心部に当たる地域を「方限（ほうぎり）」という単位に区切ったものである。武士の子弟を対象とした教育である郷中教育の起源は鎌倉時代にあるとされているが、郷中が教育組織としての機能を発揮し始めたのは、江戸時代中期以降のことであるとされている。

現存する藩の法令としては、島津吉隆が方限・郷中の綱紀肅正や文武の奨励を命じる文書を出している。薩摩独特の剣術である薬丸自顕流¹が体育教育、思想教育として教えられたことも有名なことである。安永2年（1773）年には藩校・造士館及び武芸の稽古場であった演武館が設立された

¹ 鹿児島には「示現流」と書く東郷示現流が薬丸自顕流とは別にある。東郷示現流は主に上級武士層のお家芸であり、薬丸自顕流は主に下級武士が習ったとされる。「明治維新は自顕流が叩き上げた」といわれるのは薩摩の下級武士たちが幕末の京都で「自顕流」の使い手として活躍したからである。

時には、造士館・演武館以外の場所での武術教育や郷中における集団的活動は禁止された。しかし、これを幕末に鎌田正純が郷中教育を活性化させたといわれている。鎌田は藩の意思として、士風粛清の手段として文武を奨励した。

青少年は子稚児（こちご：6歳から10歳）、長稚児（おせちご：11歳から15歳）、二才（にせ：15歳から25歳）、長老（おせんし：妻帯した先輩）の4つのグループに編制された。今の年齢でいえば小学校低学年から中学生くらいが子稚児と長稚児にあたる。二才は高校生くらいから大学生以降の青年にあたる。またそれぞれのグループの中で頭（かしら）が選ばれた（稚児頭や二才頭など）。頭は郷中での生活の一切を監督した。

郷中のメンバーは「舎」とよばれる学舎に集って武術や学問に励んだ。郷中の数は18だったが、幕末のころには33と増加したといわれている。教育内容としては、島津忠良が完成させた47種の「日新公いろは歌」や新納忠元の作った「二才咄格式定目」（にせばなしかくしきじょうもく）などが根幹とされた。「二才咄格式定目」は以下のような内容であった。

- 一. 第一武道を嗜むべき事
- 一. 兼ねて士の格式油断なく穿儀致すべき事
- 一. 万一用事に付きて咄外の人に参会致し候はゞ用事相済み次第早速罷帰り長座致す間敷事
- 一. 咄相中何色によらず、入魂に申合わせ候儀肝要たるべき事
- 一. 朋党中無作法の過言互いに申し懸けず専ら古風を守るべき事
- 一. 咄相中誰人にてても他所に差越候節その場に於て相分かち難き儀到来致し候節は、幾度も相中得と穿儀致し越度之無き様相働くべき事
- 一. 第一は虚言など申さざる儀士道の本意に候条、専らその旨を相守るべき事
- 一. 山坂の達者は心懸くべき事
- 一. 二才と申す者は、落鬢を斬り、大りはをとり候事にては之無き候 諸事武辺を心懸け心底忠孝之道に背かざる事第一の二才と申す物にて候 此儀は咄外の人絶えて知らざる事にて候右条々堅固に相守るべし もしこの旨に相背き候はゞ二才と言ふべからず 軍神摩利支天八幡大菩薩 武運の冥加尽き果つべき儀

【現代語訳】

- 一. 武道が第一である。
- 一. 武士道の本義を油断なく実践せよ。
- 一. 用事で咄（グループ）外の集まりに出ても、用が済めば早く帰れ、長居するな。
- 一. 何事も、グループ内でよく相談の上処理することが肝要である。
- 一. 仲間に無作法など申しかけず、古風を守れ。
- 一. グループの誰であっても、他所に行つて判らぬ点が出た場合には仲間とよく話し合い、落ち度の無いようにすべきである。

- 一、嘘を言わない事は士道の本意である、その旨をよく守るべし。
- 一、忠孝の道は大仰にするものではない。その旨心がけるべきであるが、必要などときには後れを取らぬことが武士の本質である。
- 一、山坂を歩いて体を鍛えよ。
- 一、髪型や、外見に凝ったりすることが二才なのではない。万事に質実剛健、忠孝の道に背かないことが二才の第一である。この事は部外者には判らぬものである。
- 一、これらはすべて厳重に守らなくてはならない。背けば二才と呼ぶ資格はなく、軍神にかけ、武運尽き果てることは疑いがない。

明治維新で武士階級は消滅し、一旦、江戸時代までの武士の子弟の教育としての郷中教育はなくなった。しかし、西南戦争後に郷中教育の流れを汲む教育が学舎ごとに復活した。戦後も学舎は、脈々と運営されて来たが、現在の鹿児島では、青少年の社会教育の場として機能している学舎は少なくなっている。

1-2：郷中教育からの影響

稲盛は郷中教育については「弱虫がまともに育ったのは鹿児島独特の郷中教育で鍛えられた面がある。本来は武士の子弟の寺子屋だ。明治以降も各地域で先輩が後輩の小中学生の心身を鍛錬する場として存続していた。薩摩藩に伝わる示現流の稽古もあった」（稲盛、2004年a、25頁-26頁）と述べている。

稲盛はこの中では「鹿児島独特の郷中教育」と述べているが、実際には昭和の戦前に残っていたものは「郷中教育の流れを汲む地域教育」という方が正しい。稲盛本人が自著において郷中教育について言及しているのはここだけなのだが、筆者はかつて、稲盛が少年期に経験した郷中教育の内容を丹念に調べたことがある。その時のことは「鹿児島時代の稲盛和夫—青年時代から学生時代まで—」にまとめている。その内容は以下のようなものであったらしい。以下の記述は、一部、筆者の以前の論考から引用している。多少、文字を補ったり削除したり文章を修正したことをお断りする。

かつて、筆者が当時の自強学舎²理事長であった吉村松治氏にインタビューしたところによると、元々、郷中教育は地域単位の方限を基礎として行われ、その郷中は「咄相中」（はなしあいちゅう）から発したものであるという。

「咄相中」というのはお互いに心の通じる仲間が一箇所に集まってお互いに語り合う仲間同士のグループのことである。そこで話し合われるのはお互いの心身の修養に関してであった。仲間同士は自分の年齢に同じもの、近いもの、異なったものという風に形成された。そのグループ間にも長幼の序があったということであった。

² 稲盛の出身の西田小学校学区に現存する学舎。幕末からの流れを継承しており、明治に復活してから、教育内容を時代に合わせて変えながらも、今日でも地域で青少年教育を行っている。

薩摩藩時代に行われていた前近代の「郷中教育」は、1871（明治4）年、廃藩置県と共に郷中制度がなくなると同時に廃止された。だが、1877年（明治10）年頃、旧郷中（地域）を基礎として学舎が起る。西南戦争が終わった後である。稲盛の著書の中に出て来る「郷中教育」もこの意味である。郷中教育という言葉は数十年前から盛んに使われるようになったが、郷中教育がある頃にはそういう言葉はなかったとのことであった。つまりは明治に江戸時代の旧地域ごとに学舎が復活して来た時もその当時の人々が、学舎で行われる話し合いによる精神教育を「郷中教育」と称していた訳ではないようである。郷中（ごじゅう）というのは、郷の中で行っているから「郷中教育」というのではなく、郷と中（じゅう）は別であるということであった。

郷は「郷に入れば郷に従え」といういい方で使う「郷」の意味だが、中はその「中」という意味ではなく、重箱の「重」と同じ意味を持つという。また「咄相中」というのがどこの舎にもあったという。また郷中は方限を単位をしていたが、郷中という言葉がそのまま方限（町内の単位）を意味する言葉なのではない。中（じゅう）というのは、人の家庭の中に入るとすべてが見えるが、その中で子供の教育や進路などを話し合い良い方向に持って行く事だという。

郷中と方限は本来は別のものであったという。そもそも「方限」は今の鹿兒島市内だけで使っていたものである。鹿兒島市内以外の県内（出水や知覧などの郡部）でも郷中教育は行われており、鹿兒島市内においては、方限単位でこの教育を実施していたが、これも郷中教育と言われていた（以上の記述の内容は過去の筆者の論考からの引用）。

郷中教育の三大行事は「妙円寺参り」と「赤穂義士伝輪読」と「曾我どんの傘焼き」であった。今はもう「曾我どんの傘焼き」は行われなくなってしまった。稲盛が正確にどの程度、郷中教育から影響を受けたかは実際のところは分からない。本人が自著の中で「弱虫がまともに育ったのは鹿兒島独特の郷中教育で鍛えられた面がある」と述べているので、影響を受けたことは確かであるが、本人がそれほどまでには詳しく言及していないので、その程度までは分からない。

筆者がインタビューして得られた情報の範囲であるが、稲盛が子どもだった当時は、地域単位で行われていた教育と小学校単位で行われていたものがあつたようだが、当時は戦時中で教育内容も軍国少年を育てるためのものに傾斜していたという。

元々、郷中教育は武士の子弟のための教育であったから、軍国主義教育とは馴染み易い部分はあつたのかもしれない。親和性が全くなかったということはないだろう。というよりも、むしろ武士のための教育が有無を言わず軍国少年を育てるために、かなり歪められて利用されて行つたというのが、実際に近いところであつたのだろう。行き過ぎた精神論による戦意高揚のための教育が全国で行われる中で、鹿兒島では特に強く行われていたというのが実際のところだったと考えられる。

そういう意味では稲盛が当時の郷中教育から「影響」を受けていたとして、考えようによってはそれが本当に良いことなのかどうかは難しいところである。むしろ、当時、行われていた教育内容からはそれほどまでに影響を受けなかった方が良かったという見方もできるからである。時代状況を考えれば、「影響を受けた」こと自体が誇るべきことかどうなのかという議論も出てくる。だが、そうはいっても郷中教育の特徴で、今でも優れた部分と考えられているのは、同年齢、異年齢の青

少年が「詮議」によって自らの行動を絶えず内省する部分である。

詮議というのはあるテーマを出して、具体的にこのような場合には、どのように行動すべきなのかという議論をお互いにするのである。観念的な議論を排し、具体的に日常で起きるような場面を想定して問いが出される。それに対して、お互いがそれぞれの回答を出し、その回答（その人物のしようとする行動）が武士として正しい行動なのかどうかを議論するものである。当時もこれがどの程度行われていたかについては、興味深いところである。筆者がインタビューをした宮内氏の話では、稲盛の少年時代に当たる頃も、学舎で詮議は行われていたようであった。

当時も詮議が盛んに行われており、稲盛自身も積極的に詮議の場に参加していれば、確かに「影響を受けた」ということはいえるのだが、どのような詮議が行われていたのかまでは分からない。示現流の稽古をしたことをもって、郷中教育の影響を受けたとするならば、広い意味での薩摩（鹿児島）に自然にあった気風からの影響を受けたということはできるが、実際にはその範囲だったのかもしれない。

2：かくれ念仏

2-1：かくれ念仏とは

かくれ念仏とは、一般的には権力から禁止された浄土真宗（一向宗）の信仰を権力から隠れて信仰することやその集団を指す。南九州の旧薩摩藩や旧人吉藩では、約300年にわたって浄土真宗が弾圧された。そのため今でもこれらの信仰の名残が各所に見られる。中には神道と集合してカヤカベ教のように別の秘密宗教も派生したといわれているが、かくれ念仏という時には、基本的に京都の本願寺教団に属し浄土真宗の信仰を守るものをいった。

浄土真宗への弾圧が始まったのは人吉藩（相良氏）の方が早かったとされている。1555（弘治元）年に相良晴広は分国法『相良氏法度』に一向宗（浄土真宗）の禁止を追加した。薩摩藩で真宗が禁止されたのは1597（慶長2）年である。原因としては加賀の一向一揆や石山の合戦の話が各地の大名に伝えられ、大名が一向宗を恐れるようになったのが原因と考えられている。

島津家による公式の禁止は1601（慶長6）年であった。これは1599（慶長4）年に日向国において乱が勃発し、この乱の首謀者である伊集院忠真の父の宗棟が浄土真宗の信者だったという説により、乱の後に改めて浄土真宗が禁止されたことから、この乱が影響しているとの説がある。以後、300年にわたって人吉藩と薩摩藩では真宗の禁制が続いた。

薩摩藩では1868（明治元）年に、廃仏毀釈が行われる。鹿児島では徹底的に寺が破壊され神社に変えられた。その結果、真宗以外の仏教も勢力が後退した。明治9年には真宗の禁制は解かれたが、明治10年に西南戦争が始まったため、実際に禁教が解かれたのはそれ以降になった。浄土真宗は蓮如以来、「講」と呼ばれる信者のネットワークを作っていたのはよく知られるところである。300年間の長い間、かくれ念仏の信仰が地下で守られてきた理由には、この講組織の存在があった。講は番役と呼ばれるリーダーがおり、身分の差別なく組織されていたという。そして、「取次役」を通じて、京都の本願寺の本山とつながっていたといわれている。

歴史学者の芳即正氏によれば、「かくれ念仏」と命名したのは鹿児島大学教授をつとめた桃園恵

真氏である。禁止の時期については、1597（慶長2）年2月21日、再度、朝鮮出兵する義弘が出した禁令が全藩的な禁止令の初めのものだった。芳氏によれば、かくれキリシタンが長崎でも浦上地区という一部に潜在していたのに対し、かくれ念仏は奄美だけは不明なもの、ほぼ全藩的に秘密信者が存在していたと考えられている。

西本願寺鹿兒島別院によると、鹿兒島に親鸞を開祖とする浄土真宗が伝わったのは、室町時代中期の1505年ごろであるとされている。この時から日本の歴史でも他に類を見ない、約300年にもわたる薩摩における浄土真宗への弾圧が始まった。西本願寺鹿兒島別院のHPによれば真宗が排除された理由は『阿弥陀如来の前には、全ての生きとし生ける命は等しく尊い』という浄土真宗の教えが当時の封建体制にそぐわなかったから』だと説明されている。

2-2：かくれ念仏からの影響

稲盛はかくれ念仏については「私の実家は鹿兒島にありますが、まだ四つか五つのころ、父親に連れられて『隠れ念仏』に同行したことがあります。（中略）他の何組かの親子といっしょに、日没後の暗い山道を提灯の明かりを頼りに登っていく。みんな無言で、恐ろしいような神秘的な思いに浸されながら、幼い私も必死で父親の後をついていきました。登った先には一軒の家があり、その中に入ると、押し入れの中に立派な仏壇が置かれていて、その前で袈裟を着たお坊さんがお経を上げていました。（中略）子どもたちはお坊さんの後ろに正座させられ、静かに低い声で続くお経を聞いていましたが、読経が終わると、一人ずつ仏壇に線香を上げて拝むよういわれ、私もそのとおりにしました。そのとき、お坊さんが子どもたちに短い言葉をかけてくれたのですが、もう一度来るようにいわれた子どももいる中で、私はお坊さんから、『おまえはもう、これでいい（来る必要がない）、今日のお参りですんだ』と告げられました。さらに、『これから毎日、『なんまん、なんまん、ありがとう』といって仏さんに感謝しなさい。生きてる間、それだけすればよろしい』といい、父に向かって、この子はもう連れてこなくていいですよと“おすみつき”を与えてくれました。幼い私には、それが何か試験に合格したような、免許皆伝と認められたような気がして、誇らしく、うれしかったのを覚えています」（稲盛、2004年b、140頁-141頁）と述べている。

稲盛が深く仏教に帰依していることは広く知られているところである。稲盛は1997（平成9）年、65歳の時に臨済宗妙心寺派で在家得度している。僧名は「大和」という。臨済宗で在家得度したのは、長く稲盛の精神的な面での後见人であった西片擔雪老師（元臨済宗妙心寺派管長）の勧めがあったからである（稲盛、2004年a、253頁）。実際に得度したのは臨済宗であるから、稲盛はそこまで浄土真宗からのみの強い影響を受けているということはいえない。

しかし、そもそも稲盛は大きな意味での広く仏教を信仰しており、『生き方』の中にも「お釈迦様が説く『六波羅蜜』を心に刻め」という項目がある（稲盛、2004年b、160頁-162頁）。この中で稲盛は自ら仏教の六波羅蜜について解説しており、人生において六波羅蜜を守ることの重要性を説いている。また、同じ『生き方』の中に「私はなぜ仏門に入ることを決意したか」という項もある（稲盛、2004年b、226頁-228頁）。

その中で稲盛は得度を決意した理由を「死によって私たちの肉体は減びますが、心魂は死なずに永世を保つ。私はそのことを信じていますから、現世での死とはあくまでも、魂の新しい旅の始まりを意味します。だからその旅立ちに向けて、周到な準備をすべく、最後の二十年は人生とは何かをあらためて学び、死の準備をしたい。そう考えて決意したわけです」（稲盛、2004年b、228頁）と述べている。ここからも理解できるように、稲盛は大きな意味での仏教を全体として信仰しており、その信仰の内容は、宗派と宗派の違いに必要以上に拘泥するわけではなく、特に浄土真宗にのみ偏っているわけではないようである。

しかし、幼少期の隠れ念仏の体験については「それは私にとって最初の宗教体験ともいえる印象深い経験でしたが、その時に教えられた感謝することの大切さは、私の心の原型をつくったように思います。そして実際、いまでもことあるごとに、『なんまん、なんまん、ありがとう』というフレーズが無意識のうちに口をついて出たり、耳の奥によみがえってくるのです」（稲盛、2004年b、142頁）と述べられているように、最初の宗教体験として、その後の稲盛に大きな影響を与えたということまでは間違いはないであろう。

また、「ヨーロッパの聖堂などを訪れたときでも、その荘厳さに打たれて、思わずこの言葉を唱えたほどで、それは宗教、宗派を超えて私の中に血肉化している「祈り」の言葉であり、心の奥底までしみ込んでいる、『内なる口ぐせ』といえます」（稲盛、2004年b、142頁）とも述べている。ここから稲盛にとっては、幼少期のかくれ念仏の経験は、宗教心の原型、大いなるものへの畏敬の念というものを形成したということは確実にいえるであろう。

3：西郷隆盛と『南洲翁遺訓』

3-1：西郷隆盛と『南洲翁遺訓』

『南洲翁遺訓』（以下、『遺訓』と略記する）は西郷隆盛の遺訓集である。遺訓は41条、追加の2条、その他の問答の補遺から成り立っている。『西郷南洲翁遺訓』や『大西郷遺訓』とも呼ばれることがある。『南洲翁遺訓』は西郷が自ら筆を執って記した書物ではなく、庄内藩（山形県）の関係者が西郷から聞いた話をまとめたものである。旧庄内藩士と西郷との間に関係が生まれたのは以下のような理由であった。

1863（慶応3）年12月、王政復古の大号令の後に、西郷は江戸の薩摩藩邸に浪人を集めて、江戸市中の治安をかく乱させた。一方、庄内藩は江戸市中の警備を担当していた。そのため、薩摩藩邸の浪人と庄内藩士は対立することとなり、浪人が庄内藩邸に発砲する事件が起きた。そして同年12月25日には庄内藩を中心とする旧幕府方が薩摩藩邸を焼き討ちする事件が起きた。

1863（慶応3）年5月15日、西郷が率いる薩摩藩兵は上野戦争で彰義隊を破ったが、会津藩は徹底的に抗戦を続け東北諸藩は奥羽越列藩同盟を結んだ。同年8月、東北戦争で官軍は鶴ヶ城を攻撃し、9月22日に会津藩は降伏した。庄内藩は官軍を撃退したが、奥羽越列藩同盟が崩壊したことから、9月26日に降伏した。庄内藩の人々は、薩摩藩邸焼き討ちのこともあり、厳しい処分が下されると思っていたが、西郷は寛大な処置を施した。このことが伝わると、庄内藩に西郷の名声が広まった。

西郷は1873年(明治6年)、いわゆる征韓論争³に敗れ、同年11月10日に鹿児島に戻った。この時に旧庄内藩士が鹿児島に来て、西郷から直接話を聞いた。1875年(明治8年)5月にも庄内から菅実秀や石川静正など8人が鹿児島を訪れて西郷から話を聞いている。

1889年(明治22年)2月11日、大日本帝国憲法が公布されると、西郷の名誉は回復された。西南戦争で剥奪されていた官位が戻されたのである。この機会に上野公園に西郷の銅像が立てられることとなったが、この時に酒井忠篤が発起人の一人となった。菅実秀は旧庄内藩士の赤沢経言や三矢藤太郎に命じて、西郷の生前の言葉を集めて『遺訓』を発行することとなったのだった。

『遺訓』は以下のような内容から成り立っている⁴。

『南洲翁遺訓』の構成

1条～7条、20条 為政者の基本的姿勢と人材登用

8条～12条 為政者がすすめる開化政策

13条～15条 国の財政・会計

16条～18条 外国交際

21条～29条 追加の2条 天と人として踏むべき道

30条～41条 追加の1条 聖賢・士大夫あるいは君子

3-2:『南洲翁遺訓』からの影響

稲盛が西郷隆盛から大きな影響を受けていることはよく知られるところである。自ら『南洲翁遺訓』についての解説書を書いていることから、いかに稲盛が西郷を尊敬しているかが理解できる。

『人生の王道—西郷南洲の教えに学ぶ—』(日経BP社、2007年)の中で稲盛は『遺訓』との出会いについて、京セラを創業して十数年ほど経ったときのことだと述べている(稲盛、2007年、24頁)。

稲盛は「会社は急成長していました。株式を上場することもできました。しかし、内心、不安でたまりませんでした。重大な経営判断を誤れば、いつ何時、倒産の危機に瀕するかわかりません。倒産すれば、従業員やその家族を路頭に迷わせてしまいます。(中略)そんなある日、年配の紳士が訪ねてこられました。聞けば、山形県の地方銀行の頭取をなさった方で、顧問に退いてから西郷の教えを伝承する『庄内南洲会』を運営しているといわれます。その方がわざわざ『南洲翁遺訓』を私に届けてくださったのです」(稲盛、2007年、24頁)と述べている。このように稲盛自身は鹿児島時代に『遺訓』を読んでいたわけではなく、起業してから山形県の人から教えられて『遺訓』に出会った。

稲盛は西郷について「私が本書で取り上げる西郷の生き方や考え方は、幕末や明治初期にだけ通じる、かび臭い教訓ではなく、現代の荒廃した時勢のなかにおいてこそ、むしろその輝きが増すように思います。(中略)私はこれまで、『南洲翁遺訓』を座右に置き、幾度も読み返してきました。

³ 西郷隆盛が下野した、いわゆる「明治6年の政変」である。現在では西郷自身は武力で朝鮮を攻めるとする「征韓論」を主張していたのではなく、話し合いによって朝鮮を開国に導こうとしていたとする「遺韓論」だったという説が大勢となりつつある。

⁴ これは大阪大学名誉教授猪飼隆明氏による分類である。19条はどこにも分類されてないが、内容としては「天と人として踏むべき道」に含めることができる。

そのつど、生きていくうえでの貴重な示唆を得てきました。経験を重ね、人生で年輪を重ねるほどに、本書から得られる教訓は、ますます私の心に深く刻まれていきました」（稲盛、2007年、19頁-20頁）と述べている。

また「現代の乱れた世相を正すことができるとすれば、人の心というものを真剣に見つめ直す以外に道はないと私は信じます。世相とは、まさに人の心を映す鏡です。企業や経済の健全な発展も、社会や国の明るい未来も、世界の人々の安寧も、すべては私たち一人ひとりがその心を磨き上げることから始まるのです。そのとき、我々の心の鏡となるのが、この『南洲翁遺訓』なのです」（稲盛、2007年、257頁）とも述べている。

稲盛は『南洲翁遺訓』からは多大な影響を受けているが、ここでは、いくつか重要な部分を挙げておきたい。稲盛は特に人の上に立つリーダーは無私の精神力をもつ必要があることを説く。

「廟堂に立ちて大政を為すは天道を行うものなれば、些とも私を挟みては済まぬもの也。いかにも心を公平に操り、正道を踏み、広く賢人を選挙し、能くその職に任ゆる人を挙げて政柄を執らしむるは、即ち天意也」（訳：政府にあって国の政をするということは、天地自然の道を行うことであるから、たとえわずかであっても私心を挟んではならない。だからどんなことがあっても心を公平に堅く持ち、正しい道を踏み、広く賢明な人を選んで、その職務に忠実にたえることのできる人に政権を執らせることこそ天意、すなわち神の心にかなうものである）から始まる『遺訓』第1条の解説として、稲盛は「西郷は政治を例に挙げて言及していますが、これは大企業の経営者であれ、中小企業の経営者であれ、さらにはどんな小さな組織のリーダーであれ、トップに立つ者はこういう心構えでなければならないということを示しています」（稲盛、2007年、26頁-27頁）と説く。

また「トップに立つ人間には、いささかの私心も許されないのです。基本的に個人という立場はあり得ないのです。トップの『私心』が露わになったとき、組織はダメになってしまうのです。常に会社に思いを馳せることができるような人、いわば自己犠牲を厭わないでできるような人でなければ、トップになってはならないということ、西郷の教えにより、私は確信するようになりました。その後は一切迷うことなく、自分の人生のすべてを経営にかけることができました」（稲盛、2009年、28頁-29頁）と述べている。

さらに「道は天地自然の物にして、人はこれを行うものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給うゆえ、我を愛する心を以て人を愛するなり」（訳：道というのは、この天地のおのずからなるものであり、人はこれにのっとって行うべきものであるから、何よりもまず、天を敬うことを目的とすべきである。天は他人も自分も平等に愛したもうから、自分を愛する心をもって人を愛することが肝要である）という『遺訓』第24条の解説として、「これは商売も同様です。ともすれば我々は、自分の金儲けに都合のよいように考えてしまいますが、そうではありません。江戸時代に商道德を説いた石田梅岩が『真の商人は先も立ち、我も立つことを思うなり』とっているように、相手もうまくいくように儲かるようにするのが商売の鉄則であり、極意なのです」（稲盛、2009年、86頁）と説いている。

さらに「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽くし人を咎めず、我が誠の

足らざるを尋ぬべし」(訳：人を相手にしないで常に天を相手にするように心がけよ。天を相手にして自分の誠を尽くして、決して人の非を咎めるようなことはせず、自分の真心の足りないことを反省せよ)という『遺訓』第25条の解説として、「『人を相手にせず、天を相手にせよ』、これもビジネスで大切なことです。商談をするときでも、人を相手にせず、天を相手にせよ、つまり、自分の心の中にある誠、自分の心のなかにある真っ直ぐな心、すなわち正道をもって対すべきだという意味です」(稲盛、2009年、87頁)と説く。

また「今の人、才識あれば事業は心次第に成さるものと思え共、才に任せて為す事は、危くして見て居られぬものぞ。体ありてこそ用は行わるなり。肥後の長岡先生の如き君子は、今は似たる人をも見ることならぬ様になりたりとて嘆息なされ、古語を書いて授けられる」(訳：今の世の中の人、才能や知識があればどんな事業でも心のままにできるように思っているが、才にまかせてすることはあぶなっかしくて見てはおられないくらいだ。しっかりした内容があってこそ物事は立派に行われるものだ。肥後の長岡先生〔長岡是容監物、一八一三～一八五九〕のような立派な人物は今は似た人も見ることではできぬようになったとって嘆かれ、昔の言葉を書いて与えた)という『遺訓』第39条の解説として、「西郷は、知識を身につけ、能力を磨くことが悪いなどとはいいません。ただ才識だけを振りかざしても、誠の心がなければうまくいかないといっているのです。しかし、往々にして、人は才識ばかりを求めがちです」(稲盛、2009年、87頁)と現代の風潮についても警鐘を鳴らす。

稲盛は『南洲翁遺訓』の全ての条文について、自身で解説を施しているが、歴史学者などの研究者が行うように客観的に解説を施しているのではない。稲盛は西郷の『遺訓』を自分自身の経営にどのように活かしてきたかということ、長い経営者人生を振り返りながら、丁寧に解説している。特に稲盛が『遺訓』から強く影響を受けたのは、リーダーの心のあり方である。すなわち、人の上に立つものは私心をもってはいけないということである。

また、才識だけでは不完全で、リーダーには人間性が重要であるというのは、稲盛が繰り返し説くところであるが、『遺訓』の中にも、稲盛自身が常々、説いている内容とも合致することを説いている部分があった。この部分については、稲盛自身が自ら様々なところで説いてきている内容である。この部分は稲盛が西郷の影響を受けて、このような考え方になったというよりは、稲盛からみて自身が説いていたことの内容を『遺訓』に見つけ、「わが意を得たり」という感じであったと思われる。

4：日新公いろは歌

4-1：日新公いろは歌とは

「日新公いろは歌」とは、島津家中興の祖である島津義弘の祖父である島津忠良(日新斎)が5年余の歳月をかけて完成させたという47首の歌のことである。「日新公いろは歌」は薩摩藩の郷中教育の基本の精神になったといわれる。義弘も多くの影響を受けたといわれる。特に「いにしへの道を聞かなくても唱へてもわが行にせずばかひなし」という歌はよく知られている。

島津忠良は36歳の時に髪を剃り、日新齋と号した。元々は島津家の分家である伊作島津家の出身であったが、宗家から請われて薩摩、大隅、日向の三州統一の大事業を成し遂げた人物であった。晩年は加世田に戻り、善政を敷き人々から慕われた名君であったと伝えられている。

「日新公いろはうた」は47首もあるので、紙幅の関係で全てを本稿で紹介することはできないが、最初の7首だけ挙げておくと、以下のような歌がある。

い いにしへの道を聞きても唱へてもわが行にせずばかひなし

現代語訳：昔の（賢人）の道を聞いても口に唱えても、自分の行いにしなければ意味がない。

る 楼の上もはにふの小屋も住む人の 心にこそは高いやしき

現代語訳：楼に住んでいても、小屋に住んでいても（関係ない）、住んでいる人の心のあり方によって人の（価値が）高いか卑しいかが決まる。

は はかなくも明日の命を頼むかな今日も今日と学びをばせで

現代語訳：はかない人間の明日の命は誰もわからない。今日、この時に学びなさい。

に 似たるこそ友としよけれ交らば我にます人おとなしきひと

現代語訳：人間は似たような人を友とするが、我（自分）より優れた人と交わることが大事である。

ほ 仏神他にましまさず人よりも心に恥ぢよ天地よく知る

現代語訳：神仏は自分の中にある。恥ずべき行動をしたら、心に恥じなさい。天地はよく知っている。

へ 下手ぞとて我とゆるすな稽古だにつもらばちりもやまとことのは

現代語訳：下手だといって努力を怠ってはならない（自分を甘やかしてはならない）。稽古を積みば少しづつ進歩する。ちりも積もれば山となる。

と とがありて人を斬るとも軽くすな活かす刀もただ一つなり

現代語訳：罪のないものを切つてならないが、罪があっても軽々しく斬つてはいけない。人を活かすことも心一つで決まる。

4-2：日新公いろは歌と『京セラフィロソフィ』

「日新公いろは歌」が郷中教育の精神的な支柱であり、郷中教育の教育方針であったことは、既に述べたとおりであるが、稲盛自身は直接、自著の中では「日新公いろは歌」については言及していない。したがって、稲盛が著書などで多くを語っていない以上、稲盛が強い影響を受けたというようなことをいい切ってしまうといささか問題がある。しかし、何らかの意味で、「日新公いろは歌」

で説かれていることと近い内容が、『京セラフィロソフィ』で説かれているかどうかを探してみた。

すると、「日新公いろは歌」の中で説かれていることと同じ（または似た）内容を『京セラフィロソフィ』にも見つけることができたので、これを紹介して、内容の共通する部分について考察を加えておきたい。まずは一番、有名な「いにしへの道を聞きても唱へても わが行に せずばかひなし」である。この歌の意味は先に見たように、昔の道を聞いても、自分の行いにしなければ何の甲斐がないという意味である。

これは、少し述べられていることの中の軸足が異なるかもしれないが、『京セラフィロソフィ』の中の「知識よりも体得を重視する」と内容的に似ている部分であるといえるかもしれない。「知識よりも体得を重視する」の中で稲盛は『「知識よりも体得を重視する」』とは、人から教わったり、本から得た知識よりも、自らの身体で得たものを重視するという意味です。（中略）みんな頭でっかちになっていますから、理屈を知っているだけで、あたかもできるかの如く思い込んでいる。しかし、それは錯覚にすぎないのです。そういう人間には実践を通じて、理論を裏打ちさせることが必要です」と述べている（稲盛、2014、178頁-181頁）。

「日新公いろは歌」の方は「いにしへの道」とあるので、これは道徳的な教えや倫理的な徳目を指していると考えられる。「いにしへの道」、つまりは先人の説いた教えをいくら知識として知っていても自ら行動として実践しなければ意味がないということしている。これに対して、ここに引用した部分は、知識で知っているだけでは意味がなく、「知っていることとできることは違う」ということを稲盛がセラミックの焼き方と経営の二つの例を出して述べている部分である。少しその意味するところは多少は違うかもしれないが、両方とも「知っているだけでは意味がない」という内容のことを説いている部分では共通点があるといえなくもない。

「下手ぞとて我とゆるすな稽古だに つもらばちりも やまとことのは」という歌もある。これは「下手だと卑下して努力を怠ってはならない。稽古を積みれば少しずつ進歩して、遂には上手になれる。ちりも積もれば山となる」という意味であるが、この歌などは『京セラフィロソフィ』に似たフィロソフィを見つけることができる。それは「能力を未来進行形でとらえる」である。

「能力を未来進行形でとらえる」の説明には「現在の能力をもって、できる、できないを言うことは誰でもすることです。しかし、それでは新しいことや、より高い目標を達成することなどできるはずはありません。今できないものをなんとしても成し遂げようとするところからしか高い目標を達成することはできないのです」（稲盛、2014年、513頁-514頁）とある。

稲盛は人間の能力というものを、現在の能力でのみ捉えることを強く戒めている。その理由は、そのような考え方で人生を送っていると、今までにできなかったことや、現在、できないことはいつまで経ってもできないということになり、新たに物事に取り組もうとする意欲が出てこないからである。この「能力を未来進行形でとらえる」というフィロソフィは、稲盛が京セラを創業して初期の頃の経験からできたものである。

京セラの創業当時は、他の会社が引き受けられないような仕事しか取ることができず、仕事を引き受けた段階ではできるかどうかの自信がない仕事も引き受け、納期までに完成させたということが

多くあった。稲盛の自伝である『ガキの自叙伝』の中には「能力は無限」という章があり（稲盛、2004年a、101頁-107頁）、ここではアメリカのIBMから受注した仕事が、なかなかうまく行かず、苦労しながらようやく、IBMの規格を満たすことができたということが述懐されている。

この中で、稲盛は「二年余り、盆も正月もないような日々が続く、期限までに納入することができた。最後のトラックが走り去るのを見送りながらしみじみ思った。『人間、能力は無限だ』と。そして、なんとしてもやりとげるといふ強烈な願望を持ち続けることの大切さを」（稲盛、2014年a、106頁）と述べている。ここの部分は強烈な願望を持ち続けることの重要性も説かれているが、能力は無限であるということも説かれている。これはストレートに「日新公いろは歌」の影響が見られるとまでいえるものではないが、稲盛の説く「能力を未来進行形でとらえる」との共通点が見出せないわけではない。

また、「日新公いろは歌」には「やはらぐと怒るをいはば弓と筆 鳥に二つの翼とを知れ」という歌がある。この歌の意味は「穏やかと怒るのを例えると武（弓）と文（筆）である。鳥に二つの翼があるのと同じである」というものである。人間にはどちらが欠けても不完全であり、寛容な面と厳しい面の両方が必要だという意味である。『京セラフィロソフィ』にも、この内容に近いフィロソフィがある。「大胆さと細心さをあわせもつ」である。大胆さと細心さがそのままストレートに文と武に相当するというわけではないが、稲盛は人間が両極端をあわせもつことの重要性を説いている。

『京セラフィロソフィ』の中で稲盛は「大胆さと細心さは相矛盾するものですが、この両極端をあわせもつことによって初めて完全な仕事ができます。この両極端をあわせもつということは、『中庸』をいうものではありません。ちょうど綾を織りなおしている糸のような状態をいいます。縦糸が大胆さなら横糸は細心さというように、相反するものが交互に出てきます。大胆さによって仕事をダイナミックに進めることが同時に、細心さによって失敗を防ぐことができるのです」、「つまり大胆さ細心さ、温情と冷酷、合理性と人間性、それぞれ両極端の性質が、一人の人間の中で綾を織りなすように存在しているわけです」、「大胆でなければならぬときに大胆さを出す、細心でなければならぬときに細心さを出すという具合に、それぞれの性質を状況に応じてうまく機能させる能力がなければなりません」、「人がよ過ぎてても駄目、悪過ぎてても駄目。一人の人間が、その両方を併せ持っていなければならぬのです」（稲盛、2014年、210頁-212頁）と述べている。

「日新公いろは歌」では「やわらぎ」と「怒り」の必要性が弓（武）と筆（文）に例えられている。稲盛も人間一般に対して生き方を説いてはいるが、特にリーダーの場合には、一人の人間が併せ持っている矛盾している側面を矛盾と感じさせることなく、必要な場面で必要な側面を出すことの必要性を説いている。稲盛自身の著書には直接、「日新公いろは歌」のことは言及されていないので、稲盛が「日新公いろは歌」から影響を受けたとまではいえないのだが、『京セラフィロソフィ』の中に「日新公いろは歌」に通じる内容があったということをここでは示しておきたい。

おわりに

以上、本稿においては稲盛が薩摩（鹿児島）の文化から受けた影響について考察してきた。郷中

教育については、当時の郷中教育（の流れを汲む当時も続いていた地域教育）からはどの程度、直接的な影響を受けたかは、厳密には分からない。しかし、示現流の稽古などをしたということから、武士の気風を受け継ぐ薩摩（鹿兒島）の文化の中で稲盛が育まれてきたことは間違いがない。仮に実践性を重視するとか、卑怯なことはしてはいけないというような徳目にみられる、薩摩人の中に脈々と伝承されてきた考え方というものがあるとするならば、全体としては、鹿兒島の文化・風土からくる思想から稲盛が有形無形の影響を受けてきたということはいえるだろう。

かくれ念仏については、小学校に入学する前の稲盛にとっての最初の宗教体験である。稲盛の著書には、その後の人生の中で、浄土真宗自体への強い信仰で生きてきたという内容が直接的に出てくるわけではない。しかし、より大きな視点からみれば、稲盛の説く「利他の心」や感謝の心を持って生きることの重要性などは、その多くが仏教から来ているものである。かくれ念仏との邂逅、仏教との最初の出会、または、より広く宗教的なものへの最初の出会いと考えるなら、稲盛のその後の人生に大きな影響を与えたということはいえるであろう。

『南洲翁遺訓』については、稲盛は多大な影響を受けている。稲盛と『遺訓』の出会いは稲盛が京セラを創業してからのことであつたので、鹿兒島時代に読み始めていたというわけではない。しかし、人の紹介で『南洲翁遺訓』に出会ってからは、稲盛はこの書物を座右の書として実際の経営に役立ててきた。その意味では稲盛は西郷とその思想から大きな影響を受けてきたといえよう。「日新公いろは歌」については、稲盛本人は自著の中で特には詳しく言及していない以上、明確に影響を受けているとはいいきれない。だが、「日新公いろは歌」の内容と『京セラフィロソフィ』に共通点があることも確認できた。

本稿の結論は以下の通りである。まず、広く薩摩の気風・風土というものを形作ってきたものとして、「日新公いろは歌」に説かれているような徳目があつた。それらの徳目は江戸時代、郷中教育を通じて武士の子弟に教えられてきた。その中から西郷隆盛らの維新の偉人たちも出てきた。江戸時代から伝わってきたそれらの価値観は、昭和の初期にも形を変えながらも骨格部分は残っていた。薩摩の武士的な価値観を体現した代表的人物が、幕末維新の最大の功労者の一人である西郷隆盛でもあつた。

そして、その教えは『遺訓』によって、明治以降も薩摩（鹿兒島）の人々に影響を与え続けてきた。稲盛は幼少期には自然な形で、実業家としての歩みの中では、『遺訓』を読むことによって西郷の影響を受けてきた。

かくれ念仏については薩摩藩から弾圧された側である。このテーマが実のところ、論じることがやや困難なのは、郷中教育や「日新公いろは歌」は武士を育てる側のもので、心身の鍛錬を中心とした道徳教育とはいえ、いわば権力の側に近いところから発したものであるのに対して、一方、かくれ念仏は徹底して薩摩において権力側から弾圧を受けたものであるからである。稲盛はこの双方から影響を受けているのであるが、果たしてこれらを同列に論じて良いのかは難しく微妙な問題でもあるからである。

徹底的に薩摩藩の時代の教育を肯定すれば藩の政治も肯定することとなり、真宗への弾圧も含めて肯定する（あるいは、その部分には敢えて目をつぶり、意識的に議論を避ける）ことになるだろう。

うし、徹底して逆の立場に立てば、江戸時代の薩摩藩の政治を全て批判的に見ることになる。本稿においては、この微妙な問題については、どちらの立場もとってはいいない。それゆえに本稿では江戸時代の薩摩藩の政治と武士の子弟への教育システムをことさらに称揚するのは控えておいた。

昨今、郷中教育をことさら、褒め称える風潮もあるが、郷中教育は武士の子弟（しかも男子のみ）のみが受けることができたものであり、農民や武士層でも女子は受けられたわけではなかった。筆者自身は郷中教育で行われていた「詮議」や為政者としての精神性の高さを育むための教育からは個人的には学ぶべきものが大きいと考えている立場ではある。だが、明治120年のブームの中で、必要以上に郷中教育を誉め称え過ぎることには、筆者は少し慎重な姿勢をとることにしている。

一方、浄土真宗が長期間にわたって苛烈な弾圧を受け続けていたことをもってして、江戸時代の薩摩藩の藩政を全否定するというようなところまで、本稿で議論を進めるという意図もない。この議論を始めれば、マルクス主義的な思想を背景とする差別論や封建時代における支配者と被支配者の関係を論ずる議論も俎上に乗せざるを得ない方向に行き着く。この立場からの歴史学者の議論も重要だとは考えるが、本稿ではそういう方向にまで議論を進めていくことまで想定しているわけではない。

最後にこの微妙な問題に少し言及したのは、稲盛が薩摩（鹿児島）の文化・風土などからくる精神性から受けた影響について考察する際には、前近代の支配階級の論理と被支配階級の論理の二つの側面からの影響を受けているという程度のことまでは指摘できると考えたからである。かくれ念仏の部分がないければ、単純に「稲盛は薩摩の武士の気風の影響を受けている」という説明で良いだろう。だが、かくれ念仏の弾圧の歴史はあまりに苛烈なものであることと、稲盛自身が『生き方』の中で敢えて、幼少期のかくれ念仏との邂逅のことを述べていることから、最後にこの辺の問題に言及しておいた。

【参考文献】

- 稲盛和夫『稲盛和夫のガキの自叙伝』日経ビジネス文庫、2004年a
稲盛和夫『生き方一人間として一番大切なこと一』サンマーク出版、2004年 b
稲盛和夫『京セラフィロソフィ』サンマーク出版、2014年
稲盛和夫『人生の王道—西郷南洲の教えに学ぶ—』日経BP社、2007年
財団法人西郷南洲顕彰会『西郷南洲翁遺訓』増補版、2001年
松本彦三郎『薩摩精神の真髄 郷中教育の研究』尚古集成館、2007年
鹿児島県立図書館『薩摩の郷中教育』、1972年
田中惣五郎『西郷隆盛』吉川弘文館、1958年
吉田健一「稲盛和夫の少年時代と鹿児島島精神教育—自彊学舎関係者インタビューから—」、鹿児島大学稲盛アカデミー『研究紀要』第2号、2010年12月
吉田健一「鹿児島時代の稲盛和夫—青年時代から学生時代まで—」、鹿児島大学稲盛アカデミー『研究紀要』第3号、2012年3月